

～パラグアイを旅して～

写真・文 青森県立三本木高等学校 猪股 豪



①



②



③



④

開発教育の発展的実践を目的とした教師海外研修（JICA東北主催）に参加し、2010年7月31日～8月13日の14日間の日程でパラグアイを訪れた。8月のパラグアイの朝は4℃ととても寒く、一方で昼になると30℃近くまで一気に上昇し日較差が大きかった。宿泊したホテルの最上階からみる首都アスンシオンの街並みは、街全体がラトソルでつくられた瓦やレンガで赤茶けてみえる（写真①）。街を歩くとホテルのほか、携帯電話や電気製品の店、レストランなどが軒を連ね、人通りも多く活気にあふれていた。写真左奥に見える川は国際河川パラグアイ川（下流ではラブラタ川と名を変える）であり、アスンシオンからは大豆〔世界第4位の生産量（2007）〕などが船で港から出荷される。日本へはここから胡麻が輸出されており、日本の胡麻輸入の25.3%をパラグアイが占めている（2007、日本植物油協会）。

主食として食べられるキャッサバは、パラグアイでは「マンジョーカ」とよばれ、スーパーで山積みされて売られている（写真②）。皮をむいて茹でた白いキャッサバはさつまいものような食感で、味はじゃがいものように淡泊で日本人の口にも合う。主食のほか、フライドポテトのように油で揚げたり、キャッサバのデンプンをこねて焼いた「チパ」に加工されたりする。チパは保温されて店頭で売られる（写真③）ほか、街なかでは頭に載せた売り子も多くみられる。チパは“パラグアイのパン”として親しまれており、表面は多少硬いが、中はモチモチしていて、素朴な味がおいしい。写真④は、日系3世が多く通う、ラ・コルメナ日本語学校の「国語」の授業風景である。

パラグアイへの日本人移住は戦前の1936年に開始され、戦争で移住は一時中断したが、その後各地に日本人移住地が数か所建設され、多くの日本人が移り住み、現在では約7000人の日系人がパラグアイ社会に根をおろし、確固たる地位を築いている。彼らは家庭や移住地では日本語を話し、食べるものも日本食が中心で、パラグアイ産のコシヒカリやパラグアイ産の大豆でつくった納豆や豆腐を食べていた。各家庭ではNHKの衛星放送で日本の情報を毎日得ており、大河ドラマ「龍馬伝」が移住地でもブームになっていた。それぞれの移住地の日本人会が独自に日本語学校を運営し、子弟の日本語教育に力を入れている。パラグアイの公立学校は午前と午後の2部制をとり、午前に公立小・中学校に通った生徒が、午後に私立学校扱いの日本語学校に通う。「世界で一番日本語がうまい日系社会 パラグアイ（産経新聞2010年6月30日付）」と紹介されるほど日系人の日本語能力は高く、2世3世の若者の多くも日本語を常用語としている。各地の日本語学校では慢性的な日本語教師不足に悩まされているが、JICAから日本語教師として多くの青年海外協力隊が派遣され、日本の若者が活躍している。近年では、日本式の礼儀を重んじる教育が人気を集め、日本語学校には日系人だけでなく地元のパラグアイ人の生徒が多く通う姿もみられる。

現在、インドのIT産業をモデルとして、高い日本語能力と日本との時差13時間を利用した、日本語による24時間体制のオペレーションやネット通信によるソフト開発など、IT産業の推進が図られている。